(四) 月出野に移つて

婚礼の儀式を終えた翌日、姫はあらためて鎌倉の乱後の旅をくわしく語り、国を出立せし時持参せし金銀の残りをこの程なりとて舎人に渡した。比丘はこれを押しいただき、我、國を逃れいでてより金銀をみたることはない、誠に尊きことなりといい、この金は御身がもつていたまえというと、姫は涙ぐみ情なきことをいう、そのお金はどうぞお納めなされという。

そこにまた村人が多数酒と肴をもつて来て、この地の風習なりといい、酒をくみかわして、唄い踊ると騒ぎたてた。やがて宴終つて帰るとき、村人の一人がいうには「この草庵は一室よりなく、何かと暮しに不便と思う。ここより一里程のところに月出野というところがあり、ここは人家も多く往来も繁きところなり、この地に移つてはどうだろうか」という。恩師南海も先に月出野の土地がよいと勧めてくれたこともあり、今村人達もそういつてくれるので、これを機に月出野に移つた方がよいではないかと姫に相談した。姫もその方がよい旨返事をしたので、村人の助けを得て月出野に移ることになつた。比丘の草房のあつたところを比丘の坂といつている。

かくて月出野に移つた比丘は、多くの児童を集め手習を教え、姫は女子をあつめて、女のつとむべき事などを教えた。また比丘は米ケ森の神の加持祈禱をしたため村人は大いに喜び且つ敬つて上人あるいは法印とよんだ。また神事祭礼の節は姫が舞をまつたりしたため神子とよんだ。

舎人は、その後南海よりいただいた号をなのつた。美目よき子を「ぼつかい」とよんでいるが、これは、北海よりなまつたものという。数年して夫婦のなかに一子ができた。北海は喜び、自分の幼名舎人をつけてかわいがつた。この子は利発で村人は世にも珍らしき神童よとほめそやした程であつた。北海はその後米ケ森に参籠し、また余暇をもつて田を拓いた。この田は岩渕田といわれている。

ある日北海は難行苦行を思いたつて、良い場所がないものかと村人に尋ねまわつたところ、ある人が「ここより一里程の山奥に滝があり、水清くして四季水量も変らず、この滝がどうであろうか」という。北海はこの滝をみるにいつたところ、村人のいうように美しい滝で仙界といつてもよいところであつた。北海は早速その年の秋の彼岸より、この滝に入り難行苦行の願をなして十七日たつた。村人は満願の日滝にいつてみると、北海は合掌瞑目していたが、息が早く四肢がこわばつているようにみえたため、村人達は薬を集め、北海を滝よりひきあげて薬火をたいて暖をとらせ、用意の衣服を着せいろいろ世話をした。しばらくして北海は目を開いたので酒を与えたところ、まもなく常の如くなり、人の助けをえて月出野の家に帰つた。

待つていた姫は嬉し泣きに泣き崩れ、村人に酒を与えその労をねぎらつた。北海はこの苦行によつて、加持祈禱は前にも増してあらたかになり、諸人の利益になつたという。

北海の苦行した滝は、今の「宮沢の滝」にして、昔、荒川太郎という豪族の住した古城がその付近にある。

（荒　川）